

資料紹介

第一次世界大戦と在澳日本人の抑留問題（四・完）

梶原克彦
奈良岡聰智

目次

総論・解説

- 一 佐藤愛磨
- 二 城戸愛三郎（以上、第四十三号）
- 三 藤井慶乗（以上、第四十四号）
- 四 イタリア経由の退去者（以上、第四十五号）
- 五 ドイツ・オランダ経由の退去者
- 六 スイス・フランス経由の退去者
- 七 ハンガリーの抑留者（以上、本号）

解説

イタリアからの退去者に続き、今回はドイツ・オランダ経由での退去者のうち、太齋景敏（東京砲兵工廠技師）、西村美亀次郎（県立神戸病院院長）、三村鐘三郎（農商務省技師）、箕山生（医学者・匿名）、スイス・フランス経由の退去

者から金谷範三（陸軍大佐・大使館附武官）、平田静枝・野孝子（大使館書記夫人）、これらの人々の記事を翻刻する。またハンガリーにおける民間人抑留者に関する記事を合わせて紹介する。

前回の小野寺直助に関する解説^①で記したように、オーストリアからの退去に際して、二十名の一団は最終的には国立の案内所で勧められたイタリア経由を採ることになったが、先に相談したトマス・クックはドイツ・オランダ経由を提示していた。ドイツ外務省の把握するところでは、このドイツ・オランダ経由は在澳日本国大使館も在ウィーン邦人に指示していたものであった。この中立国へのルートは多くのドイツ在住者が利用した経路であり、オーストリアでもブラハに留学していた者などは、その地理上の近接から、ザクセンを経由してベルリンへ行き、ドイツに滞在していた他の日本人と合流して、同様の行程を辿ったと思われる。例えば、ブラハからベルリンへ移動した三村鐘三郎は、当時人気を博してい

た芸人曾我廼家五郎やソプラノ歌手三浦環らと同地で遭遇したこともしたためている。曾我廼家五郎は欧州漫遊中でロシアからベルリンへやって来たところであつたし、三浦環は声楽を学ぶためにリヨンからベルリンへ到着したばかりであつた。欧州情勢や日本と独逸との関係が風雲急を告げる中、ベルリンやドイツの各都市で偶然出会つた日本人たちは、このようにオランダへと三々五々同道してゐた。

もつともドイツ官憲は日独開戦数日前から「保護検束」を実施しており、そのためオランダへの途上や国境前で事情聴取される者も少なくなつたようである。今回紹介された者たちは無事に国境を越えることができたけれども、不運にも拘束や逮捕・拘禁された者たちもいた。今回紹介する記事からもわかるように、在独獨邦人は退去する頃には、オランダへ向かう邦人に対してドイツの官憲が検束や逮捕をしている事態を仄聞してゐたようである。いずれの者もまさに間一髪で難を逃れたといつたところであろう。

ところで、在独邦人の拘禁・抑留に関してヴィッピヒ氏が紹介する事例では、こうしたオランダ經由の邦人処遇の状況を逆手にとつて、オランダ經由での邦人退去の「噂」を流し、これにドイツ官憲の注意を促すことで、今一つの中立国であるスイス經由の退去を企図する者たちもいた。だがドイツからスイスへの退去はすでにドイツ官憲の知れるところであり、待ち構へた警察に逮捕される者もいた。一方、オース

トリア国内からのスイス退去ルートは、在独日本大使館閉鎖後に佐藤愛麿大使をはじめとして大使館関係者がこれを利用して用いられた。総動員令によりオーストリア国内の鉄道移動が困難になり、またドイツ同様、オーストリアでも邦人へのチェックが厳しくなつてゐたことを考えると、このルートを用的る上で、安全に通行するための様々な便宜が図られていたと思われる。それでも、大使館員の夫人の記事には退去に伴い危険や恐怖を感じたとあり、開戦と共に対日感情が頗る悪化し、敵愾心の高揚によつて人々が時に暴力行為に及んでゐた事が察せられる。またのちに参謀総長となる金谷範三をめぐる記事では、当初参戦武官の打診があつた様子が記されており、第一次世界大戦が当初はまさしく欧州の局地戦であつたことも窺い知れ、その意味でこれらの記事には「現代の起点」となる大戦をめぐる情勢が急展開した様子が示されていよう。

さて、これまで紹介してきた記事では、オーストリアを退去した者およびオーストリアで抑留された者を探り上げてきた。日本側の資料では、抑留された城戸と藤井の解放・退去ののち、第一次世界大戦中にオーストリア（ライタ川以西）に在留した日本人はいないということになつてゐる。一方、オーストリア＝ハンガリーのライタ川以東、すなわちハンガリー王国内については、一九一八年十月の段階で六名の日本

人が拘留されていたことが日本の俘虜情報局によって記録されている⁵⁾。その日本人とは、渡邊鑄吉(料理人)、中村キセ(使用人・渡邊鑄吉妻)、長田三平(軽業師)、パウリーナ・メスロ(Paulina Mesko)(軽業師・長田三平妻)、長田ジュラ(Gyula Osada)(長田夫妻の息子・乳児)、赤石孔(騎手)の六名であり、一九一五年の二月に日本の利益代表国だったアメリカから、城戸と藤井以外の抑留者として日本にその消息が伝えられていた⁶⁾。当時、城戸と藤井の解放に向けて在墮アメリカ大使館がオーストリアへ働きかけており、三月末には両名とも解放されることになった。この時、合わせて、オーストリア外務省からアメリカ大使館を経由した依頼に基づき、ハンガリーに拘留されていた六名について、同地に留まるかオーストリア・ハンガリー外へ退去するか、在ブダペシュト米国総領事館が意向調査を実施した。その結果、いずれも帰国ではなく、ハンガリーに留まることを選択した。

こうした判断の理由には、まずこれら六名がハンガリーに生活基盤を持っていたことが挙げられるだろう。一九一五年二月から三月あたりに作成されたと思われるハンガリー当局の拘禁者名簿⁸⁾では、渡邊鑄吉は週に七十クローネ、妻中村キセは四十クローネの収入を得ており、長田三平は千二百クローネの生活費を申告しており、両家族ともブダペシュトに居を構えていた。また赤石孔は騎手としてセメレ氏に雇用されており、ブダペシュトの北東にあるタタのトーヴァーロ

シュ(Továros)にやはり定住していた。長田の妻子を除けば、いずれもこの時点で一年以上ハンガリーに居住しており、赤石に至ってはすでに滞在五年に及んでいた。そのため交戦国とはいえ、ハンガリーでの生計を捨てることができなかったのかもしれない。

これら生活手段の問題と大きく関わっていたのが処遇の問題であり、この点を六名が残留した別の背景として指摘できよう。M・ステイベによるハンガリーの民間人抑留政策の整理によれば⁹⁾、ハンガリーでの状況はオーストリアのそれに多くの点で類似しつつも、軍事・財政・外交以外は両国の内政事項とするアウスグライヒ体制のため、民間人抑留政策は両国で別個に実施された。そのため、ハンガリーでの敵国民間人の監視は、オーストリア陸軍省内の戦時監視局(Kriegsüberwachungsamt)ではなく、ハンガリー国防省内の戦時監視委員会(Hadifügyleti Bizottság)によって実施された。もともと、敵国民間人の管理システムはオーストリアと同様の形態となっており、「危険な」あるいは困窮した外国人は抑留され、その他の「財力のある」者については、収容所近くの村など特定地区で「拘禁」されるか(クラスA)、さらに「危険性なし」とされれば、従来生活していた場所に警察の監視下で滞在することが認められた(クラスB)。また、これを基調としつつも、戦争の長期化に伴いハンガリーの民間人抑留システムにはオーストリアとは異なる展開が生

じた。オーストリアでは民間人抑留收容所が整理統合されていったのに対して、ハンガリーでは、小さな收容所群が増大し、その周囲に抑留者が分散配置され、さらに收容所群の中心部分から幾分離れた箇所での拘禁を認めるという形を採った。これらの分類に鑑みて、今回紹介する記事からは、当該六名が拘禁クラスBのカテゴリに分類されており、警察の監視下にあつたとはいえ、かなりの「自由な」生活を送っていたことが察せられる。こうした処遇のよさも、六名がハンガリーに第一次世界大戦中にも拘わらず生活の継続を決断する上で、与つて力があつただろう。

第一次世界大戦末期、オーストリア＝ハンガリーは諸民族の動きだけでなく、捕虜交換などで帰還した兵士たちの動きによつても、国内は不穏な雰囲気包まれていく。赤石孔と渡邊鑄吉は第一次世界大戦後、大戦に関連する抑留等の被害に対する救恤金の支給を申請した^⑩。赤石は開戦当初の段階で敵国人であることを理由として給与等が減額されたことに加えて、一九一八年五月から休戦する十月まで、突然、敵国人としてセグレッドに抑留されたことを、そして渡邊は一九一八年の三月に帰還兵の一群に略奪を受けたことを訴えている。これらの事項からハンガリーに残留した六名の命運にも、なお知られざる困難がなお存在したことも推察される。第一次世界大戦中にハンガリーに存在した日本人については、オーストリアに非公式に滞在したと思われる邦人と合

わせて、今後一層の解明が俟たれるところである。今回紹介した記事がその端緒となれば幸いである。

【凡例】

なお翻刻に際しては、以下のルールに依つた。

- ・ 適宜段落を整理し、句読点は中黒を補つた。
- ・ 漢字は原則として新字体を用いた。
- ・ 同一資料内で表記が揺れている場合、編者が統一した場合がある。
- ・ 「（）」および「」の記述は、編者が付したものである。

五 ドイツ・オランダ經由の退去者

⑩ 太齋景敏「塙国の片田舎で靚た開戦前後の光景」〔欧州戦争実記〕第七号、一九一四年十一月^⑪

皇太子暗殺の悲報

予は塙地利のアルプス連山の麓なるカツフェンベルクといふ極く／＼田舎の方に引込んで居つた。従つて此度の大戦争に就いては大都会の状況は一向知ることが出来なかつたが、却つて田舎の百姓などの思想感情を知るには便利が多かつた。

六月二十八日に塙国皇太子暗殺の悲報が伝えられ時といふものは、老幼婦女子に至るまで一通りの驚きではなかつた。塙国皇帝は最早御老體である上に、皇太子はあの様に非凡の

お方であつただけに、奥国民は片田舎の百姓に至るまで皇太子の杖柱と頼んで居つた。その皇太子が不意にあの通りの有様であつたのであるから、女子供に至るまで、丸で自分の親でも亡くなつた様な騒ぎであつた。血気にはやる若い者は、塞耳比亞位のは打ち潰して仕舞へと騒いで居る。老人婦人は此為め戦争が起りはせぬかと寄り／＼顔を見合せては心配して居る、というやうな有様で、自分も唯だ／＼気の毒な思ひで過して居つた。従つて都會に於ける雲行きは何うであるか、都會の市民が如何に激昂して居るか、如何なる騒ぎをして居るかといふ様な事情を知りたいと思ふけれども、其日の新聞さへ容易に手に入らないといふ不便な田舎でから、何も知ることは出来なかつた。

老幼婦女の心痛

皇太子暗殺の悲報で動揺した人心は、日ならずして落ちて着いたが、それと共に一般に戦争を心配するやうになつた。愈々戦争が始まれば忽ち物價が騰貴するであらうが、面うなれば銘々の生活が益々困難になるから、どうか此儘圓滿に治まつて呉れ、好いが、と云ふのが田舎の者の一般の希望であつた。

けれども、七月二十四日には愈々塞国に向つて宣戦が布告された。當時婦女子の驚きと嘆きとは一通りではなかつた。宣戦布告と同時に其の日の中に諸物價は忽ちどつと騰がつた。愈々悲嘆憂愁の陰鬱なる空氣は、平和な田舎を覆う

て仕舞つた。翌二十五日の夕方には、ドナウ河の国境に於いて奥塞両軍の初戦が行はれたという報知が来た。朴訥な田舎の者の事であるから、示威運動などといふ様な事は少しもないが、唯だ戦争の成り行きに就いて非常に心配して居るのであつた。その中に召集令を受けて今日は何村から五人、明日は何村から七人といふ風に、続々出征の途に上る若者を見受けた。村の有志が旗を立て、楽隊を先頭にして其の出征を壮んにして送る模様は、日本と少しも違ひはないが、一面に於いて、妻子老婆などが別れを惜んで、出征者の腕にすがつて泣き叫んで居る有様は、日本などで到底見られない凶である。悪く云へば、余り露骨で、丁度芝居でも見るやうな有様であるが、併しその感情を抑えず隠さず天真爛漫な所は真に同情に堪えなかつた。その一週間に於いて、安逸が露西亞に對して宣戦を布告したとの報に接した。此の急報を手にするや、奥国民は一般に急に非常な元氣を増した。そして、人氣が余程活氣を帯びて来たけれども、其の頃から鐵道の聯絡は次第に困難となつて来たといふ報せを受けたから、こんな所に居ては先々どんな騒動が起らんと計られないと思つて、早速帰朝することに決心した。

欧州全大陸の混乱

予は奥国を出て安逸を過ぎ、それより白耳義に入り、暫時安府に滞在した。独軍が白耳義の国境を侵略したといふことは、八月五日の晩安府で始めて聞いた。市民も此の急報に接

しては非常に騒ぎ出した。予は早速其の翌六日倫敦に向つて出發した。倫敦では思つた程の騒ぎもなく、一般に平穩であつた。此地に十日余り居る中に、唯一回出征する軍人を見た。だけである。

八月十五日、愈々倫敦を立つて帰朝航海の途に就いた。それよりは何も變つた出来事も起らず、只だ途中二三回停船を命ぜられた事もあつたが、それは何れも巡検せる英佛の軍艦で、我々の船が日本船と見るや直ちに開放して呉れた。

② 太齋景敏「自暴糞^{ヤベクソ}の萬歳呼はり——独兵酒氣を帯びて市内を潤歩す——」(「神戸新聞」一九一四年九月二十九日)

塙太利カツテンベルヒのボーレル會社に二年間勤務してゐたといふ東京砲兵工廠附太齋景敏氏はかう語る「塙太利が塞耳雜を相手に戦ふべく初めて動員をやつたのは七月の二十四日であつた。私はその翌日トリエストからウインナへ出てまづ徐に形成を見てゐた。その當時国内の様子は案外平靜で勿論ボツ／＼軍隊の輸送は始まつてゐた模様であつたが、別に著しい變動もなかり相なので實は内心タカを括つて帰らうか帰るまいかを迷つてゐた次第である。処が形成は刻々急を加へて、独逸が動員するとか、英國が出兵するとか穩やかならぬ風説が夫から夫へと傳わり、而もそれが愈よ事實となつて現はれ出したので、ウインナは騒然として殺氣立つて来た、金融は途絶する、各商店は閉店する。外貨の兩替など何処へ

いつてもお断り様といふ次第そこで愈よ伯林遁れやうと決心し、八月一日ウインナを立つたが、この時は既に独逸が動員した後のこと、て国境で列車は停車を命ぜられ、什しても独逸へ這入ることを許されぬ、それを八方盡力した結果辛くも一臺の乗合馬車を見出して同日夕方伯林へ着いたが、伯林の騒は實に豫想外のもので、停車場といふ停車場は悉く武装した軍隊で満たされてゐた。そんな工合で軍隊輸送のために却々普通乗客を顧みる違などはなく、待たされること實に一晝夜半、辛と三日午前一時といふ頃にそれも三等客車の隅っこに乗せられてエッセンへ向つた。所がエッセンの騒ぎと来たら伯林処でなく、召集された兵士の一團が群をなして市中を練り歩く、三色旗を眞先に軍歌を唄つて進むのだが、それが秩序ある行進ではなく、酒氣を帯びた軍隊が自暴無茶に萬歳を怒鳴り散らして市中を暴れ廻つてゐると云ふ形である、事態かくの如く愈よ急なのでアントワープへ出やうと同日即ち三日の午後五時、早々エッセンを出發したが、到る処要所々々の停車場その他には軍隊や警官が配置され警戒頗る嚴重を極め、まさかとは思ふが危険千萬な話なので思ひ切つて引返し大迂回をやって和蘭のヒンローへ出、ヒンローからアントワープへ着いたのは五日であつた。恰もこの日熱田丸が入港してゐたので、直ちに乗船して六日アントワープ發倫敦へ遁れたのだが、自分は比較的時間が早かつたのでさまで困難を感じなかつたのは誠に幸福であつた。」

③西村美亀次郎「在欧日本留学生の安否——神戸病院西村
医長、物案じの留守宅」〔神戸新聞〕一九一四年八月
二十日)

欧州の戦乱愈々大きくなつて各地の通信次第に杜絶し彼我の事情も不明になつたから、欧州の各国に留学して居る人人の家庭では孰れも心配と憂慮をもつて遠く遊学の人の身の上を思ひを走らして居るが、殊に日独間は日本から最後の通牒を發し二十三日迄の回答次第によつては振り上げた日本の拳固がどの辺に飛ぶか判らず実に危機一髪といふ時になり日独開戦説がやがて事実となつて現はれさうな取沙汰をする昨今、留学生の家族は益々不安の色に包まれて来た。

▲留学生の身上

今日本の文部省留学生は独逸を中心にして英澳露米といふ順序で目下伯林に滞在して居る数のみにても七十三人だと謂ふがこれ等の人達は通信も一時は杜絶え学資金さへ大抵七月一杯で途切れたのが多く独逸との国交が昨今のやうな仲になつて見ると独逸政府の待遇も誠に思ひ半に過ぎる程であらうから七十三人は唯大使館の保護に待つより外はない次第である。

▲西村医学士

本県の留学生としては県立神戸病院眼科医長医学士西村美亀次郎氏唯一人であつて本年四月十三日神戸駅発先づ伯林に入りその後は奥太利プラグに滞在して同地の大学校に通学し

熱心研究中であるが、動乱後は同氏の留守宅は勿論県立病院でも非常に案じて居る。今同院長鈴木博士を訪うてその安否を糺して見た。その話によると西村医学士からの近信は本月八日に着したのが最終であつてその書信の發送当時はまだこんな騒動の起らぬ前であつたから戦乱に關しては何も書いてなかつた。八月の月上旬に露都で開かれる万国眼科医大会に出席するとあつたけれど、この騒動では開会も□□□よし行つた所で帰る事も出来ない位であらう。

▲学資の心配は無い

留学生中には学資の欠乏したのもあるやうな噂であるが、西村学士は出發の際半年度分学資二千元の上へ私金を持つて行つたし、此金は正金銀行扱ひの預金で倫敦に送り全国各地で自由に取付けられるから金の心配は無いが、この戦乱中ユツクリ勉強が出来るか何(ど)うかそれが心配である。何分大国の事であるから戦争のため勉学に影響ありとは思へぬとして愈々彼我戦端が開かれ彼の国の在留邦人引揚□なつたら折角の留学も中止となるから、これのみが同氏のため誠に惜むべき事である。併し又こんな大戦争の際かの国に在留する事は実に千載の一遇、その上戦争によつて珍らしい外科学上の新しい見分を得て意外の研究が出来るかも判らぬ

▲研究者の恨事

西村医学士在留のプラグは七千余の軍隊もあり、その大学は世界有数のものであつて日本の留学生は西村君を合せて七

人目下何(ど)うして居るか近況が判らぬまゝ、亜米利加經由によつて手紙を送り維也納の日本大使館へ万引揚の際に処するための手続をするやうに言ひ送つたが、その後神戸からは飯田技師が独逸へ出発して目下その途中であるし、下山手通の大村貞吉氏も已に本月一日に荷物を送り来月一日伯林へ出発の予定も戦乱によりて延期された位であつて、交戦のために学問の研究が中止されることは何よりの恨事である。併し西村君の安否に就いては何の心配もなく定めて面白い戦況を聞きながら勉強して居ることであらう、と鈴木院長の話であつた。

▲胸轟く号外の声

右に付き西村医学士の留守宅を奥平野に訪ふと夫人まさ尾の方は語る。「主人からの近況は本月七日以後未だ参りませず、号外の参ります度、胸を痛めて居りますけれど何と致し様もございません。最近の手紙にはプラグで桜の実が美味かつたなぞ罪のない事許り書いてありましたが、開戦後の便がモウ参りますかと待て居ります。別段身上に心配はなからうとは存じて居りますけれど、折角参りましたのに途中で帰りますやうでは勉強も出来ませんからそれを誠に残念に存じます」。

④西村美亀次郎「戦乱地の留学生無事の報」〔神戸新聞〕
一九一四年八月二十一日)

▲当地西村医学士は倫敦に避難

全欧の大戦乱に關して欧州各国に在留せる本邦学生の安否頗る気遣はれ、殊に日独の国交今や危機に迫り居れる上、凶暴なる独逸は避難せんとするわが留学生を捉へてこれに凌辱を与へたりとの來電さへ伝はり、わが国遣外学生の身上愈氣遣はれ、本県より留学生として渡欧し奥国プラグに在りし神戸病院眼科医長西村医学士も亦この危険地に在りてその後の安否如何かと案じられ、本月に入りてよりその通信さへ絶え居たりしに、昨廿日突然同氏無事の報伝はれり。即ち十九日午前十時三十五分倫敦發二十日午前九時五十五分着の電報、鈴木医学博士の元に達し、電報は唯「ヨワアンゼンナリ」とのみにて詳細を知り難きも、察するところ外電報ずる所の如く同医学士も逸早く倫敦に避難したるものなるべくその途中にて或は独逸国の横暴に遭ひしやも知る可からず、されど無事なりと聞きて同氏の家庭は勿論県立病院にても初めて安堵したりと。

⑤西村美亀次郎「瑞西ベルンより」〔神戸新聞〕一九一五年八月二十七日)

県立神戸病院西村医学士近信

小生巴里より瑞西チュリツヒに参り一週間滞在の後、当べ

ルンに転じベルン大学眼科教授ジグリス博士の許にて研究する事と相成候。予て聞き及びし如くチューリッヒといひ当地といひその絶景誠に世界一の名に耻ぢず当地在留日本人は小生を合せて六名、教室にては教授中の手術を見、又講義を聴き居候。その親切なる待遇は万里孤客の身に取り染々(しみ)心嬉しく且市民一般の気風も良く日本人は安んじて留学するを得申候(七月八日瑞西ベルン、アウゲンタリニツク大学にて西村生 函はベルン、アルペン河上の記念高梁橋)

⑥三村鐘三郎「伯林から和蘭へ——本邦留学生避難の詳報」
〔『神戸新聞』一九一四年九月二十六日〕

▲本邦留学生避難の詳報

農商務省技師三村鐘三郎氏は奥国に留学中であつたが今度の欧州大開戦と共に先づ身を以て伯林に遁れそりより百方苦心の末漸く和蘭に避難した左は同国アムステルダム市から八月十四日附を以て岡本山林局長に宛て郵送し來つた書信の説である。

▲奥国より伯林へ

「七月二十八日奥塞開戦の前から私は留学地出發の準備を整へて置いたが動員の爲め交通は一時中止となり何うしたものかもしれないと案じてゐると引續いて英国と開戦となつたので最早一日も猶豫は成らずと大使館と市長の證明書を貰ひ

受け荷物も自分で携帯し得る程度のものとし八月七日先づ伯林へ向つた之は他に途がなかつた爲めである。そして深夜十二時ポーデンバツハ市にザクセン王国警察署の證明書を請取りて平時は七時間にて到達し得る伯林へ二十四時間を費やして到着した。

▲留学生の大混乱

當時伯林には独逸国内に在る我留学生の全部が自分と同じく避難して來たので日本大使館も日本人倶楽部も大混雜佛國境のフライブルクから避難した人などは独逸官憲兵の爲嚴密なる身體検査を受け一晝夜一片のパン一掬の水も得ざる窮境に陥り中立國たる瑞西國境は十基間の鐵道を破壊した爲め非常に困難したと云う話を聞いた。其中日本が中立を宣言せざるは英国を扶けて背面より独逸を衝く爲めだと云う不安が独逸国内に漲り立つたので日本人の身邊には危険が刻々に近づいて來た。

▲寝巻一枚本一冊

仍て一日も早く帰朝せねばならぬと百万苦心したが西比利亞線經由に次では米國横斷線がよいと聞いたけれどロイド汽船會社は休航の爲め和米航路に據るの外途なきを覚悟したがそれとても迎も乗船の方法がないので今度は和蘭の東洋通ひ汽船に目を着け十五日アントウエルペン發を僥倖せんと企て十一日午後六時荷物を大使館に預け夜十一時出掛ける途中で我が友人十六人組と遭遇した処が諸説紛々英貨は没収さる

べしとか書類は焼却さるべしとか噂し中にはモーニングを着用しフランネルの寝衣一枚書籍一冊と云ふ神経過敏家もあり私が二箇の鞆を所持してゐるのを盛に中止せよと云ふのを聴かず四倍の時間と三四時間宛の乗換時間を費やして漸との事で国境へ着いた。

▲漸と一室發見た

処が案ずるより産むが易く国境では検査形式的で無事通行が出来私は無事當地に着きました。他の一行は先づ海牙の公使館に至り證明書お貰つて英国に渡り日本郵船又は米国航路に依て帰朝すると申して居ります。私は早速米国航路を尋ね廻つたけれども十月にならねば明ぬとのこと更に東洋廻りを探したところ漸と一室發見しましたので明十五日出發を決定致しました。而し乗船が確實に出来るか何うかは自分にも分かりません。取敢ず一書を認めて置きます。」

⑦三村鐘三郎「蘭船に便乗し僅に敵国を逸出す——奥国より帰朝せし三村技師」『神戸新聞』一九一四年十月十日

目

農商務技師三村鐘三郎氏は明治十四年九月同省の留学生として奥匈国に至りブラーク大学教授植物生理学の泰斗チャベック博士に就いて林産物製造原料の研究をなすと共に同国の産業状態を視察しつゝ、ありしが今回端なくも奥国の大乱に逢ひ八月七日ブラークより避難して独逸に入り和蘭より同国汽船に便乗してカルカッタに至り同地より日本郵船讀岐丸に轉乘して昨

日神戸に帰着したるが氏は往訪の記者に左の如く語り。

「巴里へ巴里へ」

八月一日以来、全奥匈国は大動員を行ひ国を挙げて湧くが如く国民は正に熱狂の高潮に越したるかを思はれたるが我等が師事し居たるチャベック博士の助手七名も悉く召集され参りて残り僅かに自分一人となりたるより自分も留学期の既に終らんとするを幸ひに帰国の途に上らんとしたるに博士は決して危害の自分に及ばざるべきを保障し、今後二三ヶ月の間滞在をしては如何と頗る懇切に勧められたるも自分は屹度危害の身邊に及ぶべきとを直覺したれば恩愛深きチャベック博士を少時の袂を別ちて八月七日、大混乱の中にブラークを出て同行七人と共に同八日夜伯林に到着したり、當時伯林は宣戦布告ありて漸く旬日、市を挙げて殆ど狂するが如く郊外を横断に走る軍隊輸送の各列車は悉く「巴里へ巴里へ」と書きたる札を掲げ死を決したる軍人は勇躍して何れも難に赴かんとする態寧ろ物凄き程なり。

駅頭の看護婦

汽車奥匈国より一度独逸の領域に入れば四邊の空氣何となぐ殺氣立ち奥匈国人は何れも口々に「ロシアが恐い」と叫べるに比し独逸人の決心は頗る固く天下を席捲せんとするの氣概自から言外に溢れ、各停車場には物売の声全く絶江て篤志看護婦會員の面々何れも盛装を凝して東奔西走し出陣の將士を慰むるに日も之れ足らざるが如き有様なるが彼女等食物

慰精品を車中の士卒に與ふるのみならず濃艶なる言語を以て彼等の勞を慰めつゝ、あり自分にも尠からぬ物品を惠與し呉たるを以て自分は「日本人也」と言ひしに彼女等は言下に「日本人はロシヤに將ちたる國民也。この後も宜しく御頼み申す。」と云ひ捨て、何れへか立ち去りたり。

⑧箕山生「独塊を逃れて(上)(下)」「読売新聞」

一九一四年九月二十五日、二十六日

忘れもせぬ六月二十八日、仕事を少し早く切上げて五時半に研究所を飛出す途端、出逢頭に研究所の助手に遭ふと、突然皇太子が暗殺されましたと叫んだ。御氣の毒様もそこそこに気が急ぐので帰宿はしたが夫で友人と約束したヂミユ(土着民族)の芝居も中止だらう、然しとにかく約束だからと芝居の前に行く。果して凡ての木戸は閉され大巾の黒布の三四反もあらうと云ふ黒旗がだらりと下つて居る。観客は段々と集つて、茲に一群彼所に一群、すると鶏官が来て今日は皇太子の御不幸に対して休業ですと言ふ。外国人と思つて、あらう。読者諸君、僕が

△警官を鶏官と 書いたとて審かり給ふな、奥国の警官は黒の中折帽の様なものに牡鶏の尾を房々と飾つて居るので、僕は警官と鶏官を好い対照と思つて居るのである。やがて友人が来たので共に市内の状況を視察する、之れが日本なら号外の出ると共に各戸に巾旗が掲げられるのであるが、翌日にな

つても官衛大会社に大巾の三四反の黒布を屋根からダラリと下げるだけで、各戸に巾旗などはなく、何んだか物足らぬ様な気がする。皇儲暗殺は、直接か間接か動機となつて、七月二十八日には塞国に対して奥洪国は宣戦した。研究所に行く」と『君鉄道が通じなくなつたから帰れんぜ』と云ふ助手がある。僕は動員令が下つたから出なければならんと云ふと、僕も僕もと云ふ。一般に塞国の背後には露国ありと云つて、連りに

△日本の此機を 利用して背後を突けと云ふ。此時から露国に勝つた日本人として我々は従前より注意を拂はれ、遇ふ人も露国と開戦すれば好いと云ふ。其口実は日露戦争の時に償金を遺さなかつたからだと云ふ。僕は奥人の氣概なきを歎ぜざるをえない。既に宣戦をした位なら、素より勝算の歴々たるものがある可きに、不安の念に駆られる様では何程士氣に關するか知れぬ。のみならず塞国の首都は広くもあらぬ川を隔てゝ国境にあるから戦線の布告の号外となつて出る時分には、既に之を占領して仕舞ふ可きに、其後戦報の少しも来ないのみか塞国が二三日して漸く宣戦の布告を出すと云ふ有様で、外交の發達した国の戦争は斯んなものかと寧ろ僕らをして歎賞せしめた、然し市内の広告所には、我國民に告ぐと國王の揭示もある、其他の警告の様な広告が張出され、動員令迄が出るので、之れではすぐ

△敵に兵数が知らるる 様なものだがなど、余計な心配ま

でしたといふのは、此地はペーメン人六分の五、独逸種族六分の一で成立つて居り、近來ペーメン種の反感より町名迄もペーメン語のみとし独逸語で書くのを廢する有様、僕が当市に來たてに地図を買ふ可く書店に飛込んだ時、無論看板はペーメン語であるが、書籍が並べてあるし事情を知らぬので、地図位はと思つて独逸語で「市区の図はあるか」と云ふと、それには答へないで「仏語を談すか」と來た「然」と云つて仏語で問ふと今度は「英語を談すか」と云ふ。「然君」と答て次で英語で聴くと、今度は獨逸語で「已れの所には獨逸語の本は一冊もない、獨逸語の看板のある所の本屋に行け」と劍もほろゝ、斯様なのは極端であるが、兎に角場所も狭い為もあり又た勝手に料理店に飛び込めば献立もチシユ語、給仕もチシユ語で不便甚しい。(八月十五日アムステルダム、ヴィクトリアホテルにて)(以上、九月二十五日)

或る日友人が、預金の取戻しが甚しいから引出して置くが好いと云ふ不思議なことだ

△銀行が破産す　るなら引き出すのも当り前だが、戦争は国民の戦争であるのに、とは思つたが、ドウデ僕は四五日中に帰朝の途に上るのであるから次手と思つて、二日目に引出しに行く、成程女とか老人とか下等社会の者とか云ふものが敢て引出すのではないが銀行内に不安な顔をして徜徉して居り、銀行員が懇々と説聞かせて居る。処へ僕が全部の引出しを願つた、スワ事よと衆目が集まる、銀行員は氣転を利して

「貴君は御帰朝なさるので全部御引出ですな」と問ふた。無論眼にも物を言はせて居る。僕が「否」と答へると、銀行員の顔は急に曇つた。飛んだ藪蛇だと云ふ意識がありありと読まれる。然し此「否」には少し芝居気があつたので、矢継早に「僕はドクトルであるから此暑中休暇を利用して戦時に於ける赤十字の経営を視るため戦地特志医院に願ひに行かんとして全額を引出すのである」。此答への終るか終らぬに銀行員の喜びに満てる多謝の聲は響いた。僕の答は一つの石で二羽の鳥を撃つたのである、一は銀行に対する不安の念を消し、一は

△外国人でも戦争　を間接に助くる氣概ありとの士氣を示したからである。然し僕の芝居は尚ほ続いた、其処に集まつた妙齡の婦人連に向つて「貴女方も篤志看護婦を志願するため、戦地に行かれては如何です、この三千　冠で二三人はお連れ申しますが。」此時僕は西洋婦人に嘗て見ざる尋常の態度を見た。は何れも首を少し斜に俯向加減に一寸顔見合せて言ひ合せた様に何時になき尋常の聲で「多謝々ドクトルの君よ!」三千　冠は僕の命に次ぐ大事の金だ、右の衣囊に突込で左様なら!此日夕刻、仕事を終へて帰るさ、壁に張られた広告を見ると、

△市長の告示に　近來紙幣を金貨に換ふることを申出で、甚しきは貨幣ならざれば物品を売らざる商人ある由不心得云々……」。噫、種族を異にする国家は面倒なものかな、越えて

三日、友人が引出しに行くのと、一回二百冠^{フクロギ}、七日目ならねば更に引出し難しと云ふ。後になつて見れば無論左様^{さよう}すべきことゝ思へど其処迄は気が付で、やれ市長の證明の、大使館の戦時通行券のと、幾度か無駄足をして、平時ですら十三時間を要する維納^{ウィenna}の大使館の證明は間に合わず、儘よダメなら引還す迄と度胸を握え、一日一回の郵便車に乗る。鞆を両手に提ぐる時糧食は忘れたれど、奥国内にては「サンドウイチ」を売る処あつて飢もせず、夜半に国境に着いたが、別に番兵も居らず、検査もなくそれでも警察の證明が入用だらうと云ふので、暗夜に吊橋を渡つて

△索遜国の警察 を訪ひ證明を書きかへて貰つて再び汽車、普国内は各駅特志婦人会員が出て甲斐なくしく何人にも印象を供して居り、中には、私は斯くの如く国家の爲めに盡力して居りますと言はん許りの、自働車用の塵除眼鏡を額に掲げて活動する処等、西洋婦人に持つて来いの情景である。かくて僕は戦争の悲劇を知らずに伯林に着いたが伯林の日本俱樂部は悲觀の神に呪はれて戦々兢兢、それも其筈フライブルグを引上げて帰伯した連中は、二晝夜飲食をしなかつたとか、或は某氏は

△真裸体にされ て検査をされたとか、書類を押収されたとか、中には見て来た様な嘘を言ふのもある。汽車は無論荷物や預からぬから、持てるだけの荷を持つ。書類を彼是言つたら独逸語の稽古に訳してやらう、英国の金貨を敵国の貨幣だ

とて押収したら、「達磨にお足があるものか」と代りに独貨を貰つてやらう、と意気込んだほどでもなく、荷物は一寸引繰り返しただけ、日記帳も論文^{アルバイト}も何も見向きもせず、新作製した證明書を一寸見て、直しい！さて今度の戦争で一つ面白い現象は極端な独逸崇拜の同胞が戦時に於ける民心を見聞して、日本が偉いと言ひ出したことで、此の事変に因り国民の心理状態が暴露せられて、殆ど凡ての留学生者に日本の優れることが自覚されたのは甚だ嬉しい。(八月十五日、アムステルダム、ヴィクトリアホテルにて) (以上、九月二十六日)

六 スイス・フランス經由の退去者

①金谷範三「觀戰武官派遣」(『読売新聞』一九一四年八月三日)

▽駐奥金谷大佐

奥洪国政府より我が政府に対し觀戰武官派遣方に就き交渉ありたるを以て、我が陸軍は直に在奥洪国駐在武官金谷大佐を派遣することに決し、一日其旨電命する所ありたり。猶ほ戦局の進捗と共に各国共に各觀戰武官を特派する筈なるが我陸軍に於ては其国駐在の武官をして従軍觀戰せしむることに内定し居れりと云ふ。

②金谷範三「東人西人」(『朝日新聞』一九一四年十月十四日)

奥国大使館附武官陸軍大佐金谷範三君は奥国が塞国に向つて開戦を布告すると同時に奥国軍へ従軍を出願し奥国でも是を歓迎した。△然るに時局の發展は独逸の参加となり次で英人も参加し終に日独の開戦から日奥の国交断絶となつたので奥軍に従へる金谷大佐は如何にして居るかと心配する者もあつたが、奥国では彼を鄭重に取扱うて瑞西へ送つた。△彼は現に瑞西に居るが同国は交戦列国の間諜が集まつて居て諸種の報告を売買して居るので、金谷大佐の所へも日夕間諜が附き纏ふてウルさくて困つて居るさうだ。△横浜の武相貯蓄銀行は目下支払停止で休業中だが、整理委員の整理案なる者も預金者の権利を無視したヒドい者であると云ふことだ。△預金者が整理委員に向つて其の整理案に不同意を唱へたら「不同意なら勝手にしろ」と言つたので預金者は何れも激昂して居るさうだ。△仏国のルイヤールと云ふ陸軍中佐は今年七十歳の老人であるが千八百七十年の仏独戦争にも参加して奮戦した勇士である。△然るに今回の戦争が始まるや驍肉の嘆に堪へずして当局者に向つて「何卒此際一兵卒として軍役に服して前年の恥辱を雪ぎたい」と出願したので当局者は其の志を壯として旧連帯の補充に編入したさうだ。

③金谷範三「佐藤大使帰朝期」(『読売新聞』一九一四年十月十六日)

前奥国駐劄特命全權大使佐藤愛磨、同大使館参事官西源四郎、同大使館附武官より参謀本部附に転勤の金谷歩兵大佐並びに平田領事夫人其他の一行は十四日日本郵船会社に汽船常陸丸にて香港に帰着したるが、来る廿日神戸着帰朝の旨其筋に電報ありたり

④平田静枝・矢野孝子「心細い恐ない航海でした——平田・矢野両夫人語る」(『神戸新聞』一九一四年十月二十一日)

佐藤大使一行中に妙齡花の如き二美人あり。何れも黒地に褻付きの揃への洋装いども床しく鳥毛の花帽千華やかに着したるが上陸後大使と別れて海岸後旅館に投宿せり。これぞ去る八月二十七日大使と共にウインを發し爾來しの行を共にせしものにして年若き圓顔の佳人はモスコウ駐在平田領事婦人静江(静)年稍長けし面長の美人は同領事館附矢野書記官夫人孝子(孝)なり、兩夫人は往訪の記者を迎へて交々語るやう「妾達はウイン出發依頼佐藤大使と御一緒に旅行したのでありますから大使のお話で充分旅行中の模様はお分かりだらうと存じます。妾達出發當時のウインは大変な戦争騒ぎで聞く処に依ると豫後備軍も既に出揃つて国民軍の召集に着手し十七才以上四十五才の男は皆兵隊に徴されるといふ次第、で

すからウイン市民の殺気立ってゐること、いったら非常なもので、戦場へ出る国民軍の大群衆は『プリンツ・オイゲン行進曲』といふ勇ましい軍歌を唱つちやア街から街へ練り歩んでゐます。一種の大きな示威運動なんですね。けれども日本人に對する感情はそんなに悪かつたとは思はれません。勿論途中二度までも列車に投石されましたが、それ等は徒に熱狂し興奮した彌次馬も悪戯に留まつて、決して奥国人一般の感情をこの一事に依つて代表的に見るといふことは出来ないと思ひます。現に妾達の近所の人々などは大変別れを惜しんでくれました。戦争が済んだら直又歸つてゐらっしゃいといふ調子で出發の際などわざ／＼停車場まで送つて来て手巾を振つたり帽子を翳したりして心から懐しげに見送つて下さいました。佐藤さんのお話の『大使館送迎列車』と仇名される奥国政府特別仕立の列車は奥国境ブツクまで妾達を送つてくれるので、それからスイスを経てリオンへ出ましたが、思ひなしか大変気が楽になった。心安いやうな心持がされました殊にリオンの停車場で出征兵士の見送りに来てゐる群衆が妾達の列車を大使一行と知つたものか一齊に日本語で『萬歳々々々！』ツて歓迎してくれたのは涙の出るほど嬉しうムんした。航行中ですか？マルセイユを出た當時はさう困難な航海とも思ひませんでした、ケレンで例の独艦エムデンが出没するといふ警戒を受取つて以来大変心配を致しました。男の方達は『なアに大丈夫ですよ』といつて力を付けて下さる

んですが、それでも『一寸先は闇の夜だ』とか『明日も知れぬ運命ですわね』なんかと戯ひ半分に仰有られるとツイ妙に悲しい心細い気がしましてね、それに船の名が常陸丸でしよう、縁起でもない『第二の常陸丸、辻占が餘り好くありませんぜ』など御幣を擔ぐ方なども出て来る、その度毎にハラ／＼させられました」云々と語り終つて華やかに微笑み合へり。

七 ハンガリーの抑留者

①「洪牙利に於る俘虜待遇 赤十字國際委員の報と六名の邦人」(『読売新聞』一九一五年十一月十九日)

目下熾さかんに火の手を拵げつ、ある欧州戦乱に際し各国の赤十字社は何れも大活動を試みつ、あるが中に俘虜救恤委員なるものが置かれ、俘虜に関する通信の受授

△家族故旧等 より俘虜に送らるゝ慰問品の受附、動靜問合せに對する回答等を取扱つて情報局の手助けをして居る杯(など)は最も機宜に副ふた事業であるが、最近國際委員會は洪牙利国の調査に係る同国内の俘虜の状況に関する報告を我が赤十字社へ通告してきた。之に依ると、目下同国内に收容されてゐる俘虜の総数は英、米、露、白、仏、モンテネグロ、塞爾維セルビア等を合せて約二萬人ばかりであるが、其の中に我が同胞も六人居る。そして其の取扱ひ法は警察の監視を受け

ゐものと、収容されるものとの二つになつてゐて、わが六人の同胞はその第一の部に入つてゐる。これは唯

△警察の監視 に附せられてゐるだけで、此監視中最も軽いものは本人に出頭の義務を課する事なく、只監視するに止まり、最も重いものと雖も唯一定の日時に当該官憲の目前に出頭する義務を課せらるのみで、其の現住地に滞在し、業務に服する事には何等の制限も設けられてないとの事である。尚ほ此外^{ほか}洪牙利の俘虜救恤委員は細微に亘つて同国内にある俘虜の状況を報じてゐるが、兎に角斯る機関の設けられたのは誠に喜ぶべきことである。

②赤石孔「競馬界の浦島太郎 突然帰つた赤石騎手 二十年前欧州に派遣されて 最高の栄を土産に」(『東京朝日新聞』一九二七年三月十七日)

競馬熱の盛んな欧州で日本人の騎士としてたつた一人ジョケイ(百回以上勝つた者に与へられる)といふ最高の資格を獲た赤石孔君(三)といふ青年が数日前フラーリと帰朝した。明治四十二年三月時の農商務省馬制局では

優秀な少年を欧州に派遣し、彼地の進歩した馬術について研究せしめるべく全国区に希望者を募つた。おびたゞしい申込者が殺到したその中からたつた一人選抜されて馬術のもつとも進歩してゐるといふハンガリーに派遣されたのが赤石君で

あつた。当時赤石君はまだ十四になつた許りだつたが温かい両親の許をはなれて見も知らぬ遠い異国へ送られハンガリーで唯一の大騎士として知られてゐるセミル・ミイクロスの弟子になつた。生来冒険好きで軽快に出来上がつてゐる赤石君はたちまち師匠の認むるところとなり

弟子入りして一年目にはアツブレントスの名で晴れの競馬場に出た。これが同君出世の緒ぐちとなりとん／＼拍子にアスペランドから最高の榮譽あるチヨケイの資格を獲得するに至つた。この時同君は僅に廿二歳であつた。チヨケイの資格を持つものは欧米を通じて三百有余人であるが、日本人でその名を獲たものは同君がはじめてゝある。十六日本社を訪問した赤石君は日本語を

話すのに困つて謙そんしながら

『私がハンガリーに派遣されますと第一番に私の親に知らして頂きましたのは御紙です。日本を旅立ちましてから丁度廿年になります私があんまり変り過ぎてゐますので両親は東京駅に迎へに出てゐながら会はずじまひでした。今度帰国致しますについてはチエツコスロバキアの鈴木公使から非常にお世話になりました。日本の馬術は欧州に比べますととても幼稚です。この五月目黒の競馬にはもちろん出場しますが出来るだけ日本の馬術界のため盡したいと思ひます』

同君の父峰之助氏は目下福島市で弁護士を開業してゐるが

廿年ぶりになつかしい親子の対面をしたときは手を取り合つて泣き合ったといふ

なお赤石君は英、独、仏等の競馬に出場し若い女や貴婦人達に取巻かれて優勝した日には一日三万円からの収入があつたが、いろいろの事情からほとんど無一文で帰国した

理想的の騎士

帰国の事情

外務省の某氏語る

同君について外務省の某氏は『赤石なら欧州競馬界で有名なものです。昨年ハンガリーの競馬に規則違反でオミットされたので帰国したのでせう。何分体重が軽く足が短く理想的の騎士に出来上つてゐるのです』と語つてゐる。

【追記】本稿は、愛媛大学リサーチユニット「グローバル地域研究」(GLOCAR)、京都大学学際・国際・人際融合事業「知の越境」融合チームプログラム(SPIRITS)「近代日本の捕虜・抑留経験に関する国際共同研究」(研究代表者・奈良岡聰智、二〇一七～一八年度)、科学研究費、基盤研究(B)「第一次世界大戦中・戦後の日中関係と東アジア国際秩序」(対華二十一カ条要求の波紋)(課題研究番号:18H00825、研究代表者:奈良岡聰智、二〇一八年度～二〇二〇年度)による研究成果の一部である。

(1) 梶原克彦・奈良岡聰智「第一次世界大戦と在澳日本人の抑留問題(三)」「愛媛大学法文学部論集 社会科学編」第四十五号、二〇一八年、四頁。

(2) 参照、奈良岡聰智「八月の砲声」を聞いた日本人―第一次世界大戦と植村尚清『ドイツ幽閉記』千倉書房、二〇一三年。

(3) Rolf-Harald Wippich, *Internierung und Abschiebung von Japanern im Deutschen Reich im Jahr 1914*, in: *Zeitschrift für Geschichtswissenschaft*, Jg. 55 Heft 1, 2007.

(4) 梶原・奈良岡、前掲論文、一二三頁、註(2)を参照。

(5) 俘虜情報局「在独澳法国被抑留解放及死亡日本人名簿」(大正七年十月調)〔JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B0709056500〕、日独戦争ノ際帝國俘虜関係一件(5-2-80-33)〔外務省外交史料館〕13枚目。

(6) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B07090576800「欧州日独戦争ノ際在外公館及本邦人引揚一件 第二卷(5-2-10-24_002)〔外務省外交史料館〕(96枚目)。これら六名の氏名や漢字表記は資料①と②にまちまちであるが、本解説で使用している表記が新聞記事や大戦後の救恤に関する資料などから間違いが少ないと思われる。当時の在澳アメリカ大使館による邦人解放の動きについては、梶原克彦「オーストリア≡ハンガリーにおける敵国民間人の抑留・拘禁と解放―日本人抑留者の事例を中心に―」『愛媛法学会雑誌』第四十四卷第三・四合併号、二〇一七年、参照。

(7) 「一九一五年四月六日付在ブダペシュト米国総領事より在ウィーン米国外大使宛」JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B07090576900「欧州日独戦争ノ際在外公館及本邦人引揚一件 第二卷(5-2-10-24_002)〔外務省外交史料館〕(25枚目)。

(8) *AT-OeStA (Österreichisches Staatsarchiv) / HHStA (Haus-, Hof- und Staatsarchiv)* MdA AR F36:582-1

(9) *Matthew Stibbe, The internment of enemy aliens in the Habsburg Empire,*

1914-18, in: Stefan Manz, Panikos Panayi and Matthew Sibbe (eds.), *Internment during the First World War: A Mass Global Phenomenon*, Routledge, 2019, p.69ff.

- (10) 「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B09073069700」日独欧州戦争関係救恤一件／申請書 第三十四卷 (5-2-17-0-30_10_034) (外務省外交史料館) (赤石孔) ならびに「JACAR (アジア歴史資料センター) Ref:B09072966700」日独欧州戦争関係救恤一件／申請書 第五卷 (5-2-17-0-30_10_006) (外務省外交史料館) (渡邊鐸吉)。
- (11) 「砲兵工廠技師 太齋景敏」とある。
- (12) 「在和蘭 箕山生」とある。